

琉球弧の自然誌

講師：木村政昭（理学部 3 1 4 A）

教室：共通教育棟 3 - 1 0 4 号室

「沖縄海底遺跡の謎」

第五章を読んで 及び 講義 の考察

理学部物質地球科学科 地学専攻

0 0 3 2 1 9 B

小嶋 純史

今回、自分は「琉球弧の自然史」を受講して、貴教授の講義を聴くうちに“海底遺跡” = “古代文明の跡”という考え方が浸透してしまいました。反論の余地も無く、講義に聴き入ってしまいました。そして、後は実際に潜って確かめるだけだと思いました。今年の四月当初、自分は地学的見地から遺跡ポイントのような地形も自然に出来るのではないかという詳しく調べもせず真っ向から否定した考えを持論としていました。しかし何かを否定する場合、意見を聴いて実際に自分で確かめる事は常識的にやるべき事であると思い、この講義を受講しましたが感化を受けてしまいました。講義中に見たビデオでも他の専門家の意見が“苦しい言い訳”にしか聞こえず、論議に薄いものでした。貴教授の指摘は科学的であり、考古学的にも筋が通っていたと思います。しかし、今回のレポート課題になった第五章は幾つかの不明瞭な点があると考えました。

第五章、海底遺跡とムー大陸伝説を読んで、いくつかの考察をすることができます。まず五章全体を通して言える事は“伝承的な事柄はどこまで信用して良いのか”という事が挙げられます。チャーチワードの「ムー大陸」説の根拠になったインドのヒンズー教寺院で見た「ナーカル文書」やチベットの僧から聞いた話が、近年後付けされたものである可能性は否定できないのではないのでしょうか。昔読んだ本の引用で、民族学者が書かれた本ですが、“アフリカのある民族を訪れた調査団が、その民族があまりにも星座等に詳しいので仰天したらしい。その民族は、調査団が訪れた時点で近年発見されたばかりの何光年も離れた星の衛星の状態を事細かに知っていて、更にそのことを祖先から代々語り継がれているということでした。しかし著者の民族学者はこの事実を順を追って突き詰めました。それによると数年前、この民族の近くの村を訪れた天文学者がその村民に最近発見された衛星のことを話していた事が判明しました。それが何らかの形で問題の民族に伝わったとされる事実を突き止めた”そうです。この事実をつきとめるのは大変困難であったと思います。伝播者や伝え聞いた人が忘れていた可能性は勿論の事、亡くなっている可能性や隠している可能性は否定できません。つまり、ここで言いたいのは未知なる物事を信じる事は簡単ですが、真実をつきとめる事は限りなく不可能に近い場合もあるということです。現時点、海底遺跡にしても事実の追求は不可能に近いのではないのでしょうか。いや、もしかしたら不可能かもしれません。しかし今、与那国島の海底には説明の付かないものがあることは事実です。現代科学での解析法が急がれると思います（年代測定等）。それは、自分が科学に携わった者として“実際に目で見たものを信じる”事を信念としたいからで、今回のムー大陸のルーツが琉球弧陸であった説も関連性が科学的ではないのと思うので賛成はできません。

今回のレポートを通して思ったことは、もっと開かれた論議ができることが急務であると思いました。例として、インターネットでの情報発信が挙げられます。アメリカの地球外文明探査（SETI）はアレシボ天文台からの情報をネットで流し、世界中のユーザーに解析を協力してもらい28万年分の計算を終えたとしています。同じように、世界中の地質学者、考古学者、民俗学者等が参加してくれたら必ずよい結果が得られると思います。

今回のレポートと講義は科学が発展途上であることを感じるには大変良い機会だったと思います。現代科学では説明の付かないものをこれからどうすれば良いのか考えることも必要だと思いました。